



GRAVITY  
BEAST

米村貴裕

イラスト  
ホタテユウキ

グラビティ・ビースト もくじ

グラビティ・ビースト 目次

プロローグ…………… 9

第一章 ファースト・コンタクト

(1) 重力波のお友達…………… 12

(2) 高見焼きとプリクラ写真…………… 25

(3) ギャラクシーナと孤独な銀河…………… 41

第二章 神に仕えし「ドラゴン」

(1) ふたつの星のテロリスト…………… 53

(2) ひらめきの巨大バトル…………… 66

(3) 重力をあやつれし者の体内……………81

### 第三章 プラネットX

(1) 移住者たちの亡霊……………91

(2) 妹・竜人レミとの出会い……………102

(3) 一八〇度転回！ チャンピオンとの激闘……………119

### 第四章 心へ涙のうるおいを——。

(1) 重なる奇跡のノロシ……………131

(2) 終末テロ組織のワナ……………151

(3) 作戦強行！ 死に神がほほ笑むとき……………170

エピソード……………  
197

あとがき……………  
201

●スタッフ●

◎編集

佐田 満

◎表紙・カット

ホタテユウキ

◎装丁

yuki

◎画像処理

デザインオフィスはな

◎コピー

宇田川森和

グラビティ・ビースト



## プロローグ

二〇一六年二月、アインシュタインの宿題と呼ばれていた、世界が波のように揺らぐ現象が確認された。いわゆる重力波だ。そして日本、アメリカ、欧州の観測装置が駆使されて数十年。

人類はある重力波に不思議な信号がまじっていることを発見し、三機関の三角測量の結果、発信源が太陽系内であり、地球へ急接近しつつある点を突きとめた。それが現在、話題のマトとなっている通称、惑星Xだ。

この身、この僕こと技師の淡い作業着で、ラフな背格好の荒波銀河は学校在籍中ながら、長野にある重力波通信会社の一介の通信技師をしている。インターシップから、ずるずる深みにはまっていた口だ。

これからは新しい重力波学問が加わると察して、いち早く飛びこんだんだけど、微分積分をマジ暗算でするほど難しく、もはや脱落気味。惑星Xという好奇の対象がなかったら絶対、ドロップアウトしていたと思う。

さらに信ぴょう性の高いウワサだが、惑星Xは地球との衝突コースをたどっているらしい。地球が終わるんだったら、自分が終わることくらい、たいした問題じゃない。

短めの髪をかき分ける銀河は、暖かくなってきた長野の夜での観測をしながら、そんなヤケっぱちな考えも持っていた――。



「なあ銀河。ビットレート（通信速度）はそんなに速くない。信号の意味がわかりさえすればな。つてお前、何やってんだ？」

屋外の設備を調べていた先輩技師が、どうでもよさそうにつぶやいた。この言葉は、銀河は何度も耳にし、銀河自身もいくどとなく徒勞とらうに終わる作業を繰り返している。

「いえ。重力波を使うからって、超高度な文明じゃないかな〜って思ったんです。オウムはしゃべりますし、サルの一部は道具を使いますが、科学技術とは無縁です……」

そう思い、銀河は重力波の信号を携帯端末に入力させ、お手製の解析アプリにかけてみたのだ。しかも旧世代になったつもりで、信号を八ビット単位に区切り、同期していくのを待った。

＜WEWANTFRENDSDS……＞

表情をしかめた銀河には最初、やっぱり無意味な文字列の表示に見えた。しかし携帯端末を覗きこんできた先輩技師がなぜか、顔を蒼白そうはくにして震え声をかけてくる。

「お、お前、お前、これはどうやって表示させた？」

「あはは。ダメですよ。信号をアスキーコード（古いパソコンが使っていた文字一覧表）で置き換えさせてみたんです。もし地球の電波が届いていたら、重力波と違って有限な速度ですから……」  
と、苦笑いをうかべる銀河。

電波の場合、距離が二〇光年こうねん離れていたなら、到達まで二〇年かかる。惑星Xに「お相手」がいるならば古い電波での内容しか、人類を知らないはずだ。

「おいよ銀河。文字列をよく見ろ！」

「WE WANT FRENDSDS。我々は友達が欲しい……、げっ！ いいや、単なる偶然ですよ」

「……まだ、つづいてるぞ。どうか……我々を助けてください、だ。間違いない！ 銀河、お前、ノーベル賞クラスの発見をしちまったんだぞ！」

「え、僕はただ偶然——」

銀河が面くらっても先輩技師は、過去に偶然の発見でノーベル賞をとった者は多いと半ばわめき、事務所の方へ駆けていってしまった。

重力波、要するに重力をもあやつれる存在が、ITの古典といえるアスキーコードをプロトコル（通信方式）に使ってくるとは……。それがわざとなのか、まだ頭で暗記できていたレベルのものしか、あやつれないのか、さっぱりわからない。

ただ銀河は、返事をしてみたい気持ちでいっぱいになった。惑星Xはもう太陽系内に位置するってことは、電波の速さでも最悪、数十時間以内には到達させられる。

本来なら異星人からのコンタクトがあった場合、勝手にふるまってはいけない。日本なら内閣府へ通報し、国連では緊急会合が開かれることになっているのだ。

しかし銀河はメッセージに切実なものを感じ、いても立っても居られなくなった。

「……誰かがやらなきゃならないんだ！」

さいわい、ここにはボロっちいけれど通信系の機材がそろっている。銀河は信号判読で大騒ぎになった事務所をしり目にアンテナを、夜空で光輝く惑星Xへ定めた。

そのまま、チャットでもするようになり、あいさつからやや個人的な情報にかたよったもので、一心不乱に無許可で返信してしまった。こうして運命の賽は投げられたのだ。

「ノーベル賞はいらない。僕も新しい友達が欲しい！」

## 第一章 ファースト・コンタクト

### (1) 重力波のお友達

日本のインターネットが重力波信号の解読に成功した――。

このことは極秘裏に世界の主要各国へ伝えられ、インターネット回線を使った会合が緊急開催される。会議システムに自動翻訳の機能は装備されており、各研究所からお役所の所員までが一堂に会した。

しかし異星人探査プロジェクト「SETI」でも、若い肯定的な科学者だったカイザーシャ博士は美貌と、もくされる顔つきから後ろの長髪を結わえ直しつつ、いやな気分しかしていない。そしてそれは文字どおり、そのとおりとなった。

「カイザーシャ博士。返信はすべきではない！ 民衆の間に妙な感情論が芽生えだしたら、どうするのかね？」

「ですから……早めにコンタクトをして、手をたずさえれば、惑星同士の衝突回避のアイデアだつて生まれるかもしれないですよ」

「へふふん。惑星Xの異星人は、手」を持っていてるのかね？」

保守派の役人は、鼻を鳴らして当てつけてきた。こんな保守派や強行論派は地球との衝突回避のため、本気で惑星Xを核ミサイルで粉砕する気である。

その際、少しでもお相手と「フレンド」になつてしまつては、倫理観の問題をも巻きこんで何もできなくなると言いたいのだろう。

「心配ご無用ですわ。あなた方がフレンドになれることは、決してないと思いますから」

スリムな身のこなしでカイザーシャ博士は皮肉つたものの、ここはひとつ科学的に論破ろんぱしてみようと考えた。

「惑星Xは褐色矮星かつしよくわいせいです。万一、着火したら第二の太陽と化し、地球は熱で生存不能になります。しかも中心核の岩塊はダイヤモンドとほぼ特定され、地球の科学レベルでは『粉砕』は不可能です」  
「ダイヤモンドの相場が下落するぞ」

誰かの声むなが虚しく響き、会議の場は水を打ったように静まり返つた。重苦しい空気くわいのなか、確かな生命工学の第一人者だったフェスラ博士が話題をそらしてくる。

「褐色矮星の住人ということですから、ハードな環境にも耐えうる肉体と、惑星Xが大きいのに比例して、人間より大型な体の造りだと想定されます」

「ハードな環境とはひかえめな表現ですが、そんな星の環境に生命体が存在するとは考えにくいでしょうね」

「へいいえ。地球ではクマノミという生物は宇宙空間にさらしても耐えます。原子炉のなかにも微生物が生息しています——」との言葉途中でNASAのディープスペースセンター（深宇宙監視網）からの警報音が、容赦なく放たれた。その白衣をまとう面々が急ぎ、データを読みあげてくる。

へ惑星間航行速度で物体が地球へ接近中。予測落下軌道は……日本、ナガノ地方。衝突のマグニチユードは九クラスです！

「ま、街が……、消し飛んで、しまい……ます」

夜明け近くの長野地方では、県や役場のJアラートが鳴っていた。これは甚大な災害や危機が想定されるときに、国から伝えられるシステムだ。情報はスマートフォン等の端末にも通達されるため、避難指示の大きなアラーム音で叩き起こされた者も多い。

荒波銀河もそのひとりだった。とはいえ昨夜は興奮して、そのままベッドに倒れこんでいたので技師の淡い作業着へ、すぐ身支度は整えられた。そして避難指示でざわつく街のなか、銀河は通信会社の機器とリンクしておいた端末をみつめ、逃げる気もなかった。

「このコースなら……高見山に“着地”するな」

そう、銀河は直感的に、自分が引き寄せたのだらう異・生命体の気配を察していた。まったく未知なる者と相対してみた。これは生き物が、とくに人間が発達させた好奇心のなせるわざだ。

もしもお相手が汚染されていたり、人畜を食らうバケモノだったり、人間にとって醜悪な姿だったりしたら……。考えれば考えるほど袋小路みくらこうじに入ってしまう。こちらも相手のことをわかっていないけれど、向こうもアスキーコード程度にしか、人類を理解できていないはず。

見下している？

それもない。人類だってトントン、ツーツーツー、トントンという原始的なモールス信号で「SOS」を発信する。まさに相手は「助けて」と通信にあったように、痛切にSOSを放っていたと

いえる。

そんなお相手なら、この身はどんな姿であっても驚かない。決して逃げ出さない。信号を受けたときから、銀河は腹をくくっていた。

「どいてください。どいてください、すいません」

すでに仮住まいのアパートから飛び出している銀河は、人々や騒がしい車の流れに逆らい、丘陵きゅうりやうほどの高見山をめざした。人並みをかき分け、全力疾走しつそくしていく。

この身がファースト・コンタクト（異星人との初遭遇しつそくぐう）する人間としてふさわしいか、わからない。だけど「ごく一般的なサンプル」を実験素材に使うのは、統計学では常識だったろう。その方が、仮に拉致らちされようとも「地球に与える影響」はまったくくない。

銀河が丘陵を駆けあがっていくと、流星のごとき光のすじが白んできた夜空に輝いた。いよいよコンタクトのときが近づいてきたが、一抹いちまつの不安が頭をよぎる。

《仮に異星人の文明を発見しても、絶対に接触を試みてはならない》

車いすに乗っていた著名な天体物理学者の言葉だ。そのとおり、ささいな接触が元で、地球が侵略される危険性は否定できない――。

（案ずるよりうむがやすし）

ふと頭の片隅に美しい余韻よゐんの声広がった。自分自身のものではない。驚いて辺りを見まわすと……、暗い影に覆おほいつくされる。ついに来た！

「宇宙船……じゃない、か！ この姿は」と言葉を失う。相手はさっそく重力をあやつって、浮かんでいるのだろう。

頭上から目の前にふわふわ移動した相手は、体が金属質の銀色で、四肢すべてが太く雄々しく、また、うねりをともなう躍動していた。さざめくウロコからキンキンと乾いた音も響く。その鼻先は、流線形で段差ができ、見た目はどんな生き物より気高く勇猛そうに思えてならない。

「待って待って、ドラゴンそっくりじゃないか!」

「うふふ、地球をおとずれるのは四五〇〇年ぶりくらいかしら」

「えっ、日本語を……!」

「郷に入れば郷に従え」

お相手はあっけらかんと日本語を、それも慣用句まで駆使してきた。四五〇〇年といえばエジプト時代あたりだから、歴史に残る伝承は突飛な歴史学者の仮説どおり、異星人を示していたということ。

なにより銀河は自身の想像のなかでも、比類なき肉体と格別なる力、そしてすべての生き物の要素をかね備えた存在の「霸王」に、生き物としてあこがれを持っており、くわえて畏怖の念をいだいていた。

「どうどう? この姿にびっくりしてる?」

「……ちよ、ちよっとだけは」というのが正直なところ。リアルなゲームや映画などでさんざん見られた姿なので、異星人らしさでは期待外れだった。人気テーマパークなどには等身大とされるロボットも展示されており、恐怖心に吞まれて逃げ出さなくて済むのは、ありがたい。

それにハードな環境下で生き抜くためには、この姿が理想的なサイズと具合なのかもしれない。専門家だったら、どう判断するだろう?





「なーんだ。ちょっとだけ、なの?」

白銀色の異星人・ドラゴンは宇宙をも素肌で飛べる金属ベースとは思えない、筋骨隆々とした肉肉美をみせつけてくる。広げられた四肢の先端には、黒く鋭いカギ爪も生えていた。

不必要と思われる巨大な翼は、水色系の皮膜部分が多い。それでも、あおがれるだけで、チリのように飛ばされそうになる。

「……四五〇〇年」

銀河はまだ驚きに支配され、うわごとさながらにつぶやいた。しかしお相手は意に介さず、軽い声で話しかけてくる。ノリは極めて軽い。あまりに軽すぎる!

「それはご先祖さまのことよ。わたしはうら若き○○○○」

銀色のドラゴンは体の要所・要所に突起も生やし、やや角ばって勇ましい姿で、おそらく名前を告げた。この部分は日本語にできないのだろう。

「あなたね。返事をくれた銀河さんは? わたしも通信のオペレータだったの。三〇分間、オペレータを増やしてお待ちしていますってやつね」

「く、くわしいん……ですわね」

「わたしたちには電波が見えるの。地球からは電波が放たれまくっているわよ」

ラジオからデジタル放送まで、確かに電波はある意味、野放しの状態だ。そして電波は電磁波、つまり光の仲間であり、地球上にも赤外線まで見える生き物がある。こう考えればもっと広い範囲の電磁波や電波が見えていても物理学には反しない。

「わたしのことは、ええっと、あなたの名前、銀河からもじってギャラクシーナと呼んでね」

「……な、なんだか夫婦みたいだな」とささやく銀河の声も、重苦しく迷っていたのがバカらしくなるお相手、ギャラクシーナには、手玉にとられてしまう。

「あら〜？ 夫婦になっちゃう？」

「へ？ 夫婦！」

まねくよう、ドラゴン似のギャラクシーナがなめらかな手を差し出してきた。銀河はどんどん顔を熱くしていく。こんなに軽いファースト・コンタクトはありえない！

いきなり「異星」のすさまじさを体験させられたけれど、銀河はまだまだ警戒しながら、やってきたワケを問いかけてみる。

「やだ。あんなに熱いラブレターを宇宙中に送信した銀河さんがよく言うわ」

「ラブ？」

よ、よく思い返せば苦手な英語での返信だったので、LOVEという単語を使ったかもしれない。だけどあれは、わたしは平和を愛しますと書いた一部分で、貧相な語学力が「さいわい」したのだろう。

「虎穴こけつに入らこずんば虎兇こじを得ず、ね。まあ天体物理学も習いにきたのよ」

こう切り出してきたギャラクシーナは、地球と惑星Xの衝突危機については知っており、その学問を星に持ちかえれば、なんだかうまくできるかもしれないという。

「ぼ、僕は専門家じゃないし、重力をあつかう軌道計算きどうけいさんなんて暗算でできないから……」

惑星Xが、地球では最先端の重力波の信号を送ってきていたから、内心は超高度な文明があるものばかり思っていた。しかし違う。

ギャラクシーナたち異・生命体は、褐色矮星かつしよくわいせいの激しい環境に耐えうるため、重力をあやつる器官を持つ体へ進化した。人類はるの遙かなる祖先が、当時の生命体には有害だった酸素に対抗できうる体へ進化していったように……。

それなら現代のユニコードと違って、暗記可能なレベルだったアスキーコードを使っていたのも、うなずける。知性と理性があるからといって、必ずデジタル化社会へ進歩するとは限らないから。

「あつ、イケナイ！」

「な、なに？」

突然、咆哮ほうこうしながらの声を放ったギャラクシーナが、弓なりの首からマズルを明け方の空へ向けた。つづけて半透明ながら景色をゆがませる塊を、口より打ちあげる。塊は瞬時に天空へと消え、次の瞬間。

大空にきらめく小さな星を作った。これはたずねてみるしかない。

「今の？ 偵察衛星が来てたから、バレたらマズイかなつと思つて、ね」

「げえ〜。一機、す、数百億円もするんだぞ」

「猫に小判」と、ことわざで応じてくるけれど、出会ったばかりで異星の文明も知らない銀河にとつて、それは「戦いたくない」という意味なのか、「人類には無意味なおもちゃ」だという、ちょっと見下した意味なのか、とりはかることはできなかった。

ただ、ここでぐずぐずしていても無意味なのは確かだ。ヘタに通報でもされれば、ギャラクシーナが実験材料にされるのは目に見えている。この身に天体物理学の知識はほとんどないけれど、対策を考えながら、こちらも「急がば回れ」でいこう。

「避難指示がでてるから、ひと気はあまりない。ギャラクシーナさん、……は少だけ地球の観光でもしてみます？　せっかくだし」

「あゝ、それいい！　そうしましょう。それから、ッさん”はいらないわ。わたしも銀河くっつて呼ぶからね。さあ乗って乗って」

「……の、乗る？」

いろいろな意味での「破壊力」を受けて、また一歩、強制的に距離が縮んだ気がする。銀河は半ば呆気にとられていた。でも予想していた重厚なるファースト・コンタクトに比べても、まんざらじゃない。

それでも、いきなりタクシーよろしく「乗れ」といわれ、銀河には乗馬経験もないから怖さが出てきてしまう。ただ信頼関係を築くには、自ら信用して一歩、二歩とふみこむ勇氣が必要だ。さっそく実践しよう。

巨大なギャラクシーナが地面に身をつけてくれ、銀河はけんすいの要領で長い首すじから、首元あたりのどうにか、またがって乗れる場所に落ちついた。案の定、体は金属系なのか、冷たさが伝わってくる。と銀河は、そこである発見をした。

「あれ？　硬い硬いウロコが取っ手みたいに変形してるぞ。前に人間を乗せたことがあるのかな？」  
「では出発しよ！」

銀河の独り言に答えはなかった。ちょうど陽の出に向かって飛び出したふたりは、前途多難であってもこの先、なんとなくうまくいきそうな雰囲気に包まれていた。少なくとも今、このときだけは、そう思っていた――。

名もなき山麓の洞窟をアジトとする集団は、地響きさながらに低く、うなるような声に耳を傾けていた。輪の中心に巨体を構えられる主の言葉に、二七軍服姿のリーダー、J・ワーナーはとくに注視している。

「定めをさまたげようとする悪魔が誕生するだろう。みな、惑星Xの終末の定めを履行させ、我も悪魔払いに出向く」

「承知いたしました。どうぞご武運を！」とブーツをそろえて鳴らした。

アジトから巨大な黒き影が飛びだし、J・ワーナー自身も運命にあらう者を排除するため、集団を引き連れジープで作戦行動を開始した。

同じとき、日本の防衛省内部では、惑星Xとの衝突まで時間がないこともあり、騒然とした空気がただよっていた。そこへ追い打ちをかけるように、情報収集衛星の光学一二号の破壊。

惑星X対策室長で自衛隊将校の等々力剛は、いら立ちをかくせない声でオペレータへ問いかけた。声に合わせて、授与された武勲のメダルがじゃらじゃら音を立てる。

「惑星Xのデブリ（宇宙ゴミ）に破壊されたのか？」

「いえ、ディープスペースセンターでは、デブリは確認されていない、とあります」

「だったら光学が最後に撮影した映像を出せ！」

すぐさま大型モニタへ極軌道きょきどうにあり、長野の超上空をまわっていた衛星画像が映し出された。大規模な避難指示が出ているにも関わらず、被害を受けた形跡はまったくない。

ゆっくりモニタ画像を眺めていた等々力だったが、山間のある箇所こゝで不自然に光るモノに目があった。隕石ではなく円盤か？

「ここ、そう、ここだ。ズームしていけ」

衛星画像が拡大され、画像処理により解像度かいざうどがアップされる。有翼機の機影かと思えたが、シルエットは機械とは違う曲線を描いていた。それと対するよう、人間の姿が並んでいる。

「どこかに通報はあったか？」

「現時点で確認されておりません」

これは野放しにすると災いをまねく。PKO派遣でつちかった等々力の直感が、うったえかけてきて、さっそく策を練ることになる。惑星Xの者とするみ、たくらみを持つ者は抑えなければならぬ。

しかし最近おんみつはメディア連中の目もするどく隠密行動をとつても、かぎつけられたら厄介だ。動くなら、避難指示が出ている今がチャンスだろう。等々力は机を殴るように立ち上がり、惑星X対策室からの情報として、ひと言、つけ加えさせた。

「放射能のモニタリングが完全に済むまで、避難指示の継続を求む。以上だ」

「承知いたしました」

これで時間は稼げる。必ずやこの画像の者をいぶり、拷問ほどの尋問を与えてでも惑星Xの情報をしぼり出してみせる。惑星Xに絶望してテロ行為を働く者も少なくない。だがこの件は、宇宙からの飛来物襲来だと確認されている点いっせいかせいが決定的に違う！

「航空機を使って一気呵成いっせいかせいでいくぞ！ 急襲をかける！」

広く白塗りの研究施設では、アクティブなスーツ姿のカイザーシャ博士がナガノの情報を求めたけれど、壊滅しなかったことくらいしかわかっていない。この時点でカイザーシャ博士は、業を煮やした惑星Xからの使者到来の可能性を、しきりに考えていた。

「変ね。もしかすると……ありえるかもしれないわ」

ええ、しかも軌道解析では、まるで手探りで細かく進路調整していたとのこと。光学望遠鏡のスペクトラム解析では、有機物の反応があったこと。これらをふまえると俗にいうUFOのたぐいではなく、異・生命体そのものが目測でナガノを目指した可能性がある。

実にワイルドな文明だとしたら、その異・生命体も生き物として百獣の王さながらの大型タイプだとも考えられよう。そんなお相手の「助けて」信号とは、いったい何？

「状況はどう？ 答えはいかが？」

「いえ。デマもふくめて情報は錯綜しております」とメガネの女性職員。

相手の答えがわからず助けられなければ、最高機密だが、あと数日で惑星Xと地球とは衝突する。いいや、褐色矮星はそのサイズと組成からして、地球を丸呑みにするだけだ。

そして地球とともにすべての文明、生き物が全滅していく――。